HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	質問でプレッシャーかけてませんか? : レッツ! 聞き上手母さん (4)
Author(s)	仲, 真紀子
Description	編者 : 社団法人 静岡県出版文化会
Citation	ファミリス, 2008(9), 22-23
Issue Date	2008-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/44754
Type	journal article
File Information	LKK2008_4.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

レッツ！ 聞き上手母さん④

質問でプレッシャーかけてませんか？

北海道大学大学院教授
仲 真紀子

子どもの生活は毎日ハッピーというわけではありません。けんかをしたり、いじめたり、いじめられたり、ケガをすることもあります。知らないうちにアレルゲンが含まれる物を食べて、体調を崩すこともあるでしょう。交通事故や恐喝、わいせつ行為などの被害に遭うこともないわけではありません。

このようなことが起きたとき、「何があったのか、どうしてそうなったのか」を聞くことはたいへん重要です。いかに正確に多くの情報を引き出すかが、さらなる事故や事件を防ぎ、また、起きてしまった事故・事件の解決に役立ちます。

しかし実際には、このようなことが起こったときに子どもから話を聞くことは、なかなか難しいものです。まず、子どもの側の要因として、そのときのようすをしっかりとは見ていなかったり、忘れてしまったり、友達と話しているうちに、実際に自分が体験したことなのか、人から聞いたことなのかがわからなくなることもあります。

（イラスト／村松麗子）

●なか まきこ●福岡県生まれ。北海道大学大学院文学研究科教授。認知心理学，発達心理学専攻。母子会話，子どもの記憶に関する心理学研究のほか，子どもの司法面接，目撃証言などの研究を行っている。主な編著訳書として「目撃証言の心理学」（共著，北大路書房），「子どもの面接法－司法手続における子どものケアガイド」（アルドリッジ・ウッド著，仲編訳，北大路書房）など。

また、説明しようにも、言葉を知らないということもあるでしょう。「くるくる回った階段」と言われても、「らせん階段」なのか、「本当に回る階段」なのかわかりません。

このように、子どもがうまく話せないと、大人は心配のあまり、不適切な質問や言葉かけをたくさんしてしまいがちです。

学校から帰ってきた子どもの足に、あざがあったとしましょう。大人はさっそく「どうしたの？」と尋ねるでしょう。子どもが「階段から落ちた」と言えば、「どうして落ちたの？　どこの階段？　先生知ってるの？」と矢継ぎ早に尋ねるかもしれません。

一度にたくさんのことを尋ねる質問は、マルチ質問と呼ばれ、難しい質問形式の一つだとされています。さらには「なんで落ちたのよ。そそっかしいんじゃない」と、しかってしまうこともあるかもしれません。心配しているからこその言葉だとわかってはいても、子どもは話そうとする意欲を失ってしまうかもしれません。

いじめや暴力を心配して、「本当に落ちただけ？　落とされたんじゃないの？　いじめられてるの？　誰に？　○○くん？　○○くんに落とされたのね」などと決めつけた聞き方をしてしまうケースもあるでしょう。

このような圧力のかかる問いかけは、真実を覆い隠してしまいます。圧力や誘導となる言葉かけは、ほかにもたくさんあります。

- ●仮説（たとえば暴力やいじめがあっただろうという思いこみ）にそった質問を何度も繰り返す（大人が期待する答えが返ってくるまで）。
- ●「△△ちゃんもそうだって言ってたよ」など、補強証拠をほのめかす。
- ●「話してくれないと大変なことになる」など、情緒に訴える。
- ●「たいしたことじゃないから話して」と矮小化する。
- ●「話してくれたら、おやつにしよう」などと取り引きをもちかける、などなど。

私は裁判での子どもの証言を研究していますが、子どもの証言の正確さは、子どもからどうやって話を聞いたかにかかっていると言っても、言い過ぎではないと思います。

オープン質問で、子どもの話が適切に聞き取られていれば、話の内容の信用性は上がります。一方、誘導の中で得られた報告は、疑わしいものとなります。

次回は、事件性のあるできごとに遭遇した子どもからどのように話を聞けばよいか、面接事例を引き合いに出しながら説明します。